彼方小だより

家庭数配布

富田林市立彼方小学校
令和 3 年 6月号

「もう梅雨入り!?」

校長　藤井　貞彦

新学期が始まって早くも２カ月になろうとしています。コロナウィルスについては、一時の事を思えば勢いは衰えているようですが、まだまだ安心できる状態ではありません。緊急事態宣言も再度の延長になりました。この間、学校生活も制約ばかりで、多くの行事を延期・変更せざるを得ませんでした。保護者・地域の皆様にもご理解・ご協力いただき、感謝しております。そんな状況の中でも子どもたちは、よく頑張っています。先日、「全国学力学習状況調査」（６年生対象）と大阪府の「すくすくウォッチ」（５・６年対象の学力テスト）を実施しました。５・６年生全員が、慣れないテスト問題に一生懸命に取り組む姿に感動すら覚えました。私は、結果はどうあれ何事にも前向きにきちんと取り組むことが大切だと考えています。前向きな失敗は大いに結構。こんな時だからこそ「やってみなはれ！」精神で、少しでもできる事にチャレンジしていきたいと思います。

今年は例年に比べて雨の日が多いと感じていましたが、なんと近畿地方は５月中旬に梅雨入りしたのです。（5月１６日ごろで観測史上最速、昨年より１ヶ月近くも早いそうです。）じめじめと蒸し暑い日が続くと思うとなんだか気が滅入ってしまいそうですが、そんなことを考えていても始まらないので、「梅雨」という言葉について調べてみました。

「梅雨」とはもともと中国で生まれた言葉で、初夏に降る雨がカビをもたらすので「黴（カビ）雨」（ばいう）と書いていたそうです。しかし、じめじめした季節に「カビの雨」では、何ともイメージが悪いということで、同じ読み方で、この季節に実が熟す「梅」の字をあてて「梅雨（ばいう）」としたのです。それが奈良時代に日本に伝わったと言われています。

日本でも「梅雨」と書いて「ばいう」読んでいました（今でも「梅雨前線（ばいうぜんせん）」と言いますよね）が、江戸時代ごろから「つゆ」と読むようになったようです。理由としては「雨がたくさん降って木々に露（つゆ）がつくから。」や「梅の実が熟して地面に落ちて潰れる→潰ゆ（つゆ）から」などの説があるそうです。

また、調べていくと梅雨にまつわる言葉がたくさん見つかりました。「梅雨入り」「梅雨明け」「走り梅雨」「送り梅雨」「戻り梅雨」「空梅雨（からつゆ）」他にも、梅雨を言い換えた「五月雨（さみだれ）」、梅雨に訪れる季節はずれの寒さの「梅雨寒む」、春の長雨の「菜種梅雨（なたねづゆ）」など、実に様々な言葉が使われています。田植えをするこの時期に降る雨が、その年の稲作りを左右するものとして重要だと考えられていた現れではないでしょうか。

自然に関する美しい言葉は梅雨に限らず、私たちの回りに数多く存在します。それは昔から、自然を大切にし、自然と共存してきた証しです。これからの未来を担う子どもたちにも、そのような姿勢をしっかりと身に付けさせることが、我々 大人の使命だと思います。

梅雨の中休みの「五月晴れ」の空を眺めながら、学校教育の担う役割をしっかり果たしていかなければならないと改めて感じました・・・